

雑事記 (31)

盛丘 由樹年

気になる言葉の研究 (3)

私としては比喩的表現の言葉にときどき引っかけりをもつ。その言葉通りの（本来の）意味ではなく、飛躍して、あるいは一ひねりして考えなければならぬからだ。多くは慣用句として通用しているものだが、その言葉を初めて聞く人の多くは、戸惑うことになるし、正しく意味をとらえられないだろう。今回、そんな言葉を多めに入れた。

① ゲストハウス (guesthouse)

ゲストハウスというと、私なら真っ先に思い浮かべるのは「迎賓館」だ。そうとは言えないにしても、ゲストハウスは高級な宿泊所を意味していた。しかし、いまどきそんな高級なイメージを持つと、現物を見たときに、がっかりさせられてしまう。今では低料金の宿泊施設を、体裁よく、ゲストハウスというようになっている。この言葉の本家のイギリスでも、そうらしい。安いなる理由があることに気づかされるが、まあ、安く泊まれるなら良しとしたい。アパートをマン

ションというが如し。

② 地すべり (Landslide)

地すべりというとなんか災害のことかと思っ恐怖を感じてしまう人もいるかと思うが、それほど怖くない意味の語法がある。選挙において、人々がなだれをうつつように傾き、一人の候補者や政党の一方的な勝利になることをいう。当初、接戦と思われていた選挙で、ふたを開けてみると、一方が大差の票を獲得し、意外な人が当選することだ。「地すべり」勝利という。意外性のある結果になることだ。付和雷同的な人たちが、風潮に乗って、どうでもいいような期待をこめて投票すると、地すべりが起こる。これまでのことを思いめぐらせると、地すべりが起きやすいのは都知事選挙だ。これは人為的な災害になるのかもしれない。

③ 鉄板

定番ていばんというべきところ、鉄板てつばんという人が現れて、こ

の言葉が定着したものと考えられる。言葉の音感が似ていて、響きがいいからだろう。絶対的な定番を意味する。鉄板の硬さ・重さ・強さをイメージしたもので、インパクトのある比喩的表現になっている。

④ 市井

単純な語である「市と井」の組み合わせながら、実に意味がわかりにくい。市が管理する井戸のことかと思っではまちがいだ。それだけでなく、読み方もむずかしい。辞書を引かなければわからない言葉になっている。

まだ辞書を引いていない人のために正解を言うと、市井しせいといって、世間一般を意味する。水の出る井戸には人びとが集まり、人が多くいるところには市ができることから、民間や俗世間ぞくせいけんを指す言葉になっている。成立年代がかなり古そうだが、今でもたまに使う人がある言葉だから、頭の片隅に入れておきたい。

⑤ 背中を押す

「不意にドンと手で背中を突かれて、がけの上から谷底にまっさかさま……」そんな恐怖の状況では、この語句は使われない。ある行動を起こすことに迷ったり、ためらっていたりする人に、ゴーサインのような

言葉をかけてやることを「背中を押す」という。きっかけを与えてやることだ。励ますという言葉の意味に近い。あるいは、そのかすことだ。ただし、悪事をそのかすことではない。優柔不断の人にはこれが必要だろう。「背中を押された」といつても、最終的に判断するのは自分だから、失敗したときの言い訳にはならない。というより、背中を押されてよかつたケースに多く用いられる。

⑥ はしごを外す

困難な場に立たされ、後戻りできない状況に追い込まれることを「はしごを外される」という。手助けされて上に登った方がいいが、はしごがなければ、もう下には降りられない。はしごという実体はないにしても、状況をイメージしやすい。退路を断たれることと同じだろう。はしごを外す側の人は、いたずら半分で、悪意を持っているのかもしれない。いじわるをすることになる。

はしごを外されても。ロープで降りるなりすれば、降りることはできるかもしれない。探偵小説などで、そんな場面ではヘリコプターが飛んできて縄なははしごを下してくれる……。

⑦ 軸

軸とは、車輪の中心にあって回転する棒あるいはその部分を意味するものだが、「対立軸」「軸足を移す」などの用法では、「重要で中心的なもの」というだけの抽象イメージになっており、「回転するもの」というような属性を頭から切り離さなくてはならない。ところでその昔、枢軸国といえば、ドイツ、イタリア、日本の三国のことを指したが、枢軸とはローマとベルリンを結ぶラインの名称だったから、日本が加わるのはおこがましかった。

⑧ こんまり

「こんまり」とは何ぞや？ と一般の辞書をひも解いても出てこない。ネットで調べると、片付けコンサルタント・近藤麻里恵さんのことだとわかる。身の回りの整理整頓を実行し、自ら率先してそれを推奨している人だという。今注目されている人で、国際的にも名声を高めている。その名前を略して「こんまり」と言う。こんまりといえば、片付ける意になる。過去には、彼女だけでなく、何人かの女性たちが整理・整頓を実践して見せ、そのコツを一般に伝授してきた。マスメ

ディアがその都度取り上げ、話題になったものだ。こんまりも一時的な流行語として使われるだけになるのだろうか。

片付けるということは、言われるまでもなく、不要な物を区別し、捨てるのがキーポイントになる。しかし、自分ではなかなか片付けられないところがある。買うのは簡単だが、捨てるのは難しいものだ。下手に捨てる不法投棄になる。ごみ置き場の周辺では、口うるさいおばさんが目を光らせているものだ。

多くのものは過去の思い出とつながり、将来役立つかもしれないと思ったりするから、捨てられない。私なども、まだ使えるものを捨てる気にはなれないし、もったいないことだ。修理不能になるか、ボロボロになるまで使い切るのが理想なのだ。単に「要らないから」ではすまされない。要らないものを買った自分が悪いことになる。

自分ではどうしても躊躇してしまふから、そこで、指南してくれる人が求められる。指南されてやるのではなく、自分で行動したいところだが……。指示されなければできない人ならば、仕方がない。彼女らは、口をそろえて、未練を断ち切って「捨てなさい」というのだろう。処分すれば、「さばさばして気分もよく

なる。探し回る苦勞がなくなる」などといって背中を押す。でも、それは一時的なこと、やはり失ったことの後悔がやってきそう。

そもそも片付けできない人は、その頭の中が整理されていられないのかもしれないから、その方が先だろう。

⑨ デイスる

デイスるとは、けなす・やじる・侮蔑^{ぶべつ}するという意味で使われている。ただし、若者たちが軽いノリで、ヘマをした者などをデイスということが多いようだ。デイスられても、深刻に落ち込むようなことは少ないようだ。自尊心の強い人たちが楽しんで他人をデイスっているようにみえる（悪趣味の一つだろう）。

省略言葉だろうけれど、英語には、disで始まる単語が多いので、何の省略かは、よくわからない。そこでネットで調べてみると、disrespectの略だという説が主流になっている。これは、尊敬することの逆をいく行為であって、侮辱することを意味する。

改めて辞書を引くと、私の英語辞書にも載っていることを発見した。disあるいはdisという単語が動詞として存在し、そんな意味をもつとある。「俗

語」と分類されているから、公の場では避けるべきなんだろう。日本のテレビで、ときどき耳にするようになっていくが……。これを口にするような人は「低俗な人たち」とし、自分では使わないようにしよう。ここで私は、彼らをデイスってしまったことになる？

⑩ 確認

バスツアーでバスに乗ると、ガイドさんなどが乗客に向かって「シートベルトを確認してください」などという。「もし、シートベルトを締めていなければ、絞めてください」という意味を持つから、便利な言葉だ。

ガイドさんがAさんのシートベルトが未装着なのを見とがめてAさんに言った——「Aさん、シートベルトを確認しましたか?」、「はい、確認しました。外れていることを確認しました」

確認という言葉は、私としては「確認した」という過去形で使いたい。一般に「事故原因を早急に確認する」「担当者が確認している」などという使い方をすることが多いが、それは、確認のために調査しようという意味表示しただけのことだ。まだ確認が終わっていないのから、未確認の状態だ。どんなことが確認される

のか、調査結果次第だ。

一般に、調査することを「確認する」と言いがちだが、やはり正確ではない。確かめる・認めることは、調査した後のことなのだ。いくら時間をかけて調査しても、確認できないことがありうる。確認できなかったら、どう報告すればよいか。「確認できませんでした」と言うのは、「確認します」といったことがウソになるから、言いにくい。

つまり対話する相手が「確認します」と言ったら、それは未来のことであって、今は未確認状態であると解釈しよう。意思表示しただけだ。単純に「確認する」を「調査する」の意に置き換えればいいことかもしれない。

⑪ あおる（車の運転において、）

「オラオラ、そこをドケドケ！」と言わんがごとく、後ろから来る車が、ライトでパッシングしたり、クラクションを鳴らしたり、追突しそうにびったりとつけることがある。それをあおり運転という。

ただし、あおるの言葉には「どけ！」の意味はなく、「早く先を行け」という、せかすの意味に近いだろう。なお、英語の *agitate* には、扇動するだけでなく、い

らいらさせるという意味もある。

あおられる側にしても、そんな相手のいらだちが感じられるから、気が気でない。動揺させられる。車線を譲ればいいことだが、自分がノロノロ運転していたつもりはないからムカツときて、そんな車には道を譲らなかつたり、一旦は道を譲っても、その車を猛スピードで追いかけて、後ろにびったりつき、逆にあおつてやつたりして――

「オラオラ、テメーだけの道路じゃないだろ？ テメーがどきやがれ！」

どっちもどっちだろうが、激しやすい人などは、幅寄せと言つて、側面がぶつかるほど近寄つてきたり、車の前に出て進行を妨害するなど、しつこく嫌がらせのオンパレードを披露する。相手の車がよけそこなつて自損事故でも起こせば、「一丁上がり！」とほくそえむ……。そんな人は、自分が絶対的に正しく、相手がすべて悪いと思つているから、たとえ警察に逮捕されたとしても、ぜんぜん反省しているそぶりをみせない。大人が逆上すれば、子どものけんかよりたちが悪くなることの見本のようなものだ。

車を運転すると、いらだつ傾向のある人がいるものだから、交通トラブルは、ふとしたことで起きやすい。

些細なことがきっかけとなり、単に「あおる」では済まないレベルに発展するケースもみられる。あおり運転というより、典型的な「危険運転」になる。怒りやすい人は運転しない方がいいのだ。あるいは、運転していると怒りっぽくなると自覚するようになれば、免許を返上すべきだろう。自動運転が可能な世の中になるまで待つしかない。AI (Artificial Intelligence) も人間に近づけば、人間に似てくるだろうから、逆上したりして……。「オラオラ、テメーはジャマだ！ この旧式AIヤローめ」

⑫ 既読

既読とは、古い辞書には載っていないから、新しい言葉だ。パソコンのEメールや、スマホの通信アプリで、メッセージ(電文)を送信(発信)した後、それが相手に届いて(着信)読まれたときに、厳密にいえば、相手がメッセージ内容を開いたときに「開いたこと」を示す表示がつけられる。送信側はそれを見て、相手がメッセージを読んだことを知ることになる。自分の機器操作上のミス(例えば、あて先を間違える)や、通信経路の障害で、メッセージが相手に届かないことなどが考えられるから、それを知るのは便利な機

能だ。最近の通信機器に不慣れな人や不信感を持っている人には、都合のよい。

既読になっていのに、なかなか返事をよこさない人は、だいたい嫌われる。「既読無視」といって、怒られる一因となりうる。友人関係にヒビが入るかもしれないから、恐ろしい機能でもある。返事をせかす機能でもある。「早く返事をしないと、送信者をイラつかせてしまえうだ。どうでもいいような用件だけ、どおりあえず『了解』と回答しておこう……」

歌の一節に「暑中見舞が返ってきたのは、秋だった」(「我が良き友よ」吉田拓郎・作詞)とあるように、手紙が主要な通信手段だった時代はのんびりしていたものだが、今はあおられて、返事を返さなければならぬ時代のような。

⑬ おつかれさま

職場で仕事仲間が先に帰るとき、「おつかれさま」あるいは「ごくろうさま」と声を掛けることが定番となっている。

「仕事で疲れたことだろう、仕事で苦労したことだろう」という前提があり、相手を気遣って、それをねぎらう意味がある。「あなたは一所懸命に仕事をしてい

る」ことを認めていることでもある。たとえ、心の中で「あなたは座っているだけで楽な仕事をしているネ」〈あなたは仕事をするふりをしているネ〉と思っても、決して口にしないのがルールだ。そんな人に「おたいくつさま」などと皮肉ってはいけない。

それにはさよならの意味を含むあいさつにもなっているから便利な言い回しだ。そして基本的に、部下・同僚・上司のどれであろうと、かかわりなく使える。ただし「ごくろうさま」については上下を意識しなければならぬ。それは上司が部下に対して使う言葉としてほぼ定着しているから、部下のものが上司に「ごくろうさま」と言っては失礼になるといふ雰囲気が生じている。だいたい上司は苦勞くろうしていないのだし……。

参照記事：毎日新聞夕刊 2019/5/14 あした元気になるあれ

【要約】だれかがブログに天皇の退位に際して、

〈天皇皇后両陛下、お疲れ様でした〉と書いたら、SNS上で大炎上したとのこと。

つまり、「お疲れ様でした」も、一定の制約があるようだ。気軽な調子で言ったのがいけなかった？

鳥類観察記——某公共施設周辺にて——

盛丘 由樹年

①ヒヨドリと柿の木

某公共施設の二階の窓から眺めると、周辺一帯が公園になっており、樹木が多くみられる。中でも、3、



4本の柿の木が近くにあるのが特徴的だ。高さが約8メートル、幹の直径は太いとところで50センチほどもある。樹齢が100年くらいあるとみえる。公園に柿の木があるのは珍しい。この施設の竣工は昭和59年（1984）9月だが、それが建設

される前の、私がこの地に来た時（1969年）にも柿の木があったと私は記憶している。もつとはるか以前からここにあったものだろう。おそらく、明治時代に農家の庭先に植えられたものが、そのまま残されたものと私は想像している。この辺一帯は戦後、農地だったものが区画整理され、工業用地のためや市街化のために再開発された。ここは市有地になり、公園や公共施設が造られたが、元からの植生の一部を活かしている。柿の木がその対象になったのだろう。

柿の木は老木でありながらも、枝を大きく広げている。春は新緑の葉をつけ、秋には大量の柿の実を枝につける。大量の葉を落としたあとも、オレンジ色の小ぶりの実が、満艦飾の状態になって残る。食べられるはずだが、それをもいで食べようとする人はいない。人が手を伸ばせば届くものでも、そのままにされている。食いしん坊の私としても、それを食べたことはいから、味はわからない。公共の場にある柿の実だから、食べるのは遠慮している。たぶん渋柿だろう。

（もしそうだとっても渋抜きをすればいい）

柿の実はほとんど落ちたりせず、数カ月間その姿を保つ。でも、冬のある日、鳥の群れがやってきて、その実をついばみ始める。ヒヨドリやムクドリが大挙し

てやってくる。食べ物が少ない冬の季節、柿の実はその貴重なえさになっている。人が食べなくても、鳥が食べるようになっていく。

②アオサギと金魚

某公共施設の玄関わきに、6メートル四方ほどの西洋式の人工池がある。一種の噴水設備らしい。大ききの異なる四角いプールが三段ほど積み重ねられ、一番上のプールから水があふれ出て、段状の石板の上を流れる仕組みになっているようだ。ただし、ポンプなどの装置が故障したままになっているらしく、かなり以前から水は循環していない。水が流れているのを見た記憶は私にもはっきりしない。その復活を求めるつもりはないが、水が流れないから、下段のプールには、雨水がたまっているような様相だ。20センチほどの深さがあり、半透明のやや緑がかった水をたたえている。中に、赤い金魚などが泳いでいるのが見える。その数が多くなったり、少なくなったりすることに気づいていたが、池の底に隠れたりする季節的な変動かも知れず、特に不思議とは思わなかった。

ある朝（メモによると、2019年4月16日8時50分ごろ）、私はその玄関に向かっていたとき、池



のそばに通るかかると、スマートな姿の大型鳥、アオサギが、池の中央の石板の上で、首を上にして長くのぼし、じつと立っていたのが見えた。頭から足先まで1メートルありそうだった。ツルのような体形で、特に首が細長い。羽毛の中に、黒い模様がまだらに入って、黒と白のツートンカラーになっている。翼の部分は薄い灰色だ。やや派手すぎて、カムフラージュとしては意

味がないようにみえる。

どこからか飛んできた野生のアオサギが、人の気配にも動じず、ほとんど動かないで立っていた。これは珍しい。野生のアオサギを間近で見ることが稀だから、驚きた。鳥と人との異常接近だった。そ

の距離約3メートル。サギ類は人を警戒して、人が近づこうとすると、すぐに飛び立ってしまうものだ。遠くからカメラを向けても、なかなかいい被写体になつてくれない。このときカメラを持っていたら、すぐにカメラを取り出したところだ。

なぜアオサギが来ていたかを考えると、池の中の金魚がいるからだろう。池に金魚が泳いでいるのは、風情ふうせいがあつていい。ボウフラがわかないように、金魚を入れていたのかもしれない。公共施設の職員が金魚を飼っているというより、一般の人が持ち込んで、比較的広い池に放した可能性がある。

金魚などは、野生のサギにとって、たやすく餌にできるものだろう。どうやら、楽にえさが取れる狩場になつていようだ。金魚を狙って飛来していたに違いない。この池には金魚はたくさんいるから、少しぐらい鳥に食べられても、影響ないだろう。減りすぎたら、また補充する人がいるかもしれない。彼らは鳥に食べられてしまうとは、思っていないだろうけど……。

③ コウモリとライバルの鳥たち

某公共施設の前の通路となつている広場は、一面にレンガ状のタイルで敷き詰められている。色もレンガ

に近い。その地表を小走りに歩くセグロセキレイをときたま見かける。これも黒と白のストトンカラーだ。首を前後に動かし、長い尾を上下に振りながらすばやく歩き回る姿は可憐だ。通路わきには、コンクリートブロックに囲われた花壇や植栽があつて、ツツジ、ツバキ、カリンの低木が植えられている。この空間に他の鳥たちもときどきやってくる。そして、初夏にはツバメが来て、施設玄関の軒下に巣を作る。ツバメはいつも子育てに忙しい。年々その数が減ってきた気がするが……。

夕方ここを通るとき、頭上を飛び回るコウモリのシルエットがよく見られる。主役の登場だ。音もたてず、忙しく翼手を動かしている姿には驚かされる。暗くても飛べることに感心させられる。もちろんコウモリは鳥ではない。れっきとした哺乳類だ。鳥の仲間に入れてもらえないが、飛行することに関しては似たようなものだから、「鳥類観察記」に入れることにする。

2019年4月のある日、午前中に某公共施設を訪れた私は、コウモリが飛んでいるのを見た。昼間にコウモリとは珍しい。目を疑ったが、確かにコウモリだった。

そして私の目の前で、一匹のコウモリと、ヒヨドリ

らしい中型の鳥が空中で接触した。ヒヨドリがその足でコウモリを捉えたかのように見えた。ヒヨドリがコウモリを襲った瞬間だったと私は理解した。コウモリが鳥のえさになるとは信じがたいが、飛翔力ではコウモリは鳥にかなわないから、コウモリは鳥にいじめられるものらしい。なにしろ、鳥は肉食系恐竜の子孫といわれている。あなどれない。コウモリがトリの縄張りである昼間という時間帯に入ってきたためと思われる。一種の領空侵犯だったのだろう。

彼らは、住み分けしているようだ。鳥の目が効かない暗い時間帯に出てきて、虫などを捕食しているのだろう。暗くても飛べて、空中の小さな虫を探すことのできる能力を身につけている。そうとう精密な超音波探査だ。この能力で、暗い時間帯にはコウモリが制空権を握る。鳥などが飛んでくるなら、逆にコウモリが追いかけて回すのかもしれないと私は想像したりする。

往復するドミノ倒し

盛丘 由樹年

2017年5月11日のテレビ番組、フジテレビ「奇跡体験！アンビリバボー」で、興味深いドミノ倒しが紹介されていた。オーストラリアの建設現場で撮影されたという、レンガを縦に並べてドミノ倒しをしたものだ。先頭のレンガを指で突いてやると、レンガは次々に倒れていく。レンガは互いに次のレンガに重なるように、斜めに寄りかかって倒れる。ここまではごく普通のことだが、最後尾のレンガが水平に倒れると、寄りかかったところが外れて、ひとつ前のレンガも水平になる。それが連鎖して、次々にレンガは水平になる。ドミノの波が逆流するように伝わっていく。最初のレンガが最終的に水平になると、結果的にすべてのレンガはぴったりと水平に敷き詰められる形になった。ドミノが往復運動したことがすばらしい。

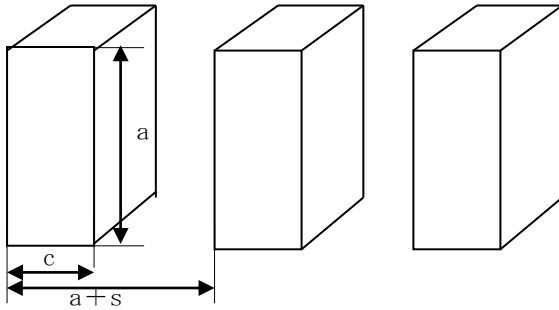
建設現場でレンガ積みの作業と遊びを兼ねて、作業員が考案したのだろう。レンガを敷き詰める作業がドミノによって完成するのだから、作業している人たちとしては「ヤッター」という歓喜の声を上げたくなるものだろう。この遊びを考案した人たちは、よほど暇だったのだろうけど、遊び心があってよろしい。

それはともかく、これが成立するための必要条件を数学的に考察しよう。たまたまその条件を満たしていたものと思われる。特に、レンガの横から見た長さ a と厚さ s 、レンガを並べて置く間隔 c が重要だ。必要な条件を満たせば再現が容易に可能だろう。ちなみに標準的レンガのサイズ（横縦厚さ）は210-100-60だ。

①並べ方

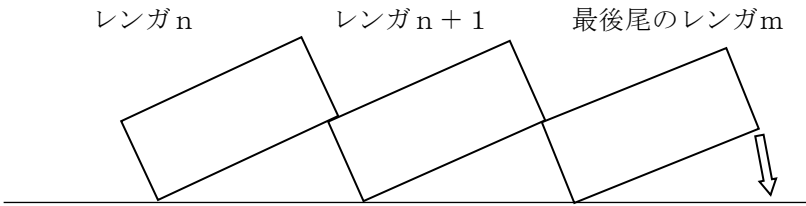
このレンガを縦に並べていく。 a はレンガの横の長さであり、 c はレンガの厚さだ。縦の長さは以下の計算に無関係なので、無表示とする。

$a+s$ は、レンガを並べる間隔であり、レンガの横の長さ a に s を加える。 s とは最終的に倒れたときのレンガ間の隙間になる。数ミリ程度の小さい値とする。



②往路のドミノ

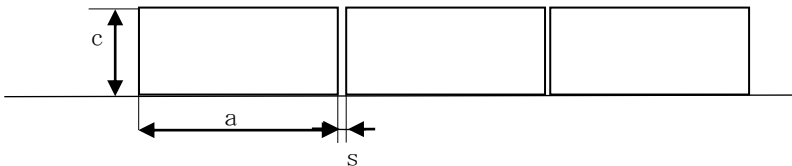
先頭のレンガを人が横から突いてやると、倒れ始める。倒れる力が次々に次のレンガに作用する。一連のレンガが、次のレンガの角に乗りかかるように静止する。



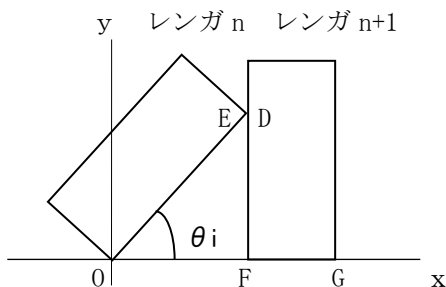
最後尾のレンガには、乗りかかるべきレンガが存在しないから、平面にバツタリと倒れる。

③復路のドミノ

すると、その一つ前のレンガも、乗りかかる支えを失い、水平に倒れる。次々とそれが外れてゆき、逆向きのドミノ現象が起きる。最終的に、以下の状態に敷き詰められる。



レンガ n の角 E がレンガ n+1 の左面に接触した最初の瞬間を考察してみよう。接触した点を D とする。



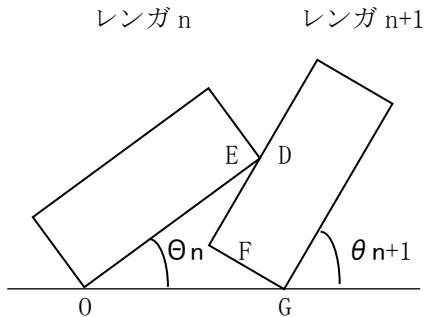
0 と中心とする x y 軸をとると、D (x0, y0) と x 軸をなす角度 θ_i は、 $x_0 = a + s - c$ だから

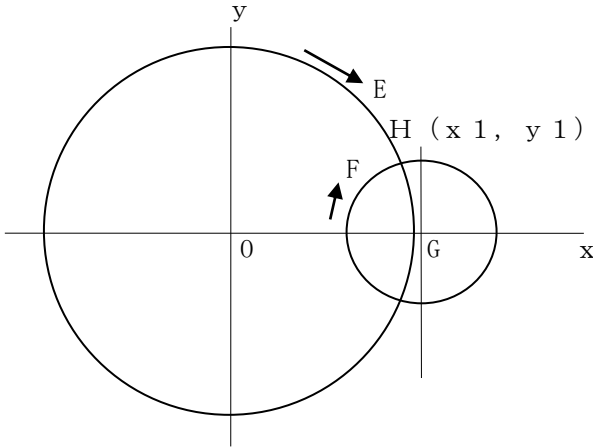
$$\cos \theta_i = \frac{a + s - c}{a}$$

の計算で、 θ_i の角度が求められる。レンガ n は倒す力をレンガ n+1 に伝える。するとレンガ n+1 は G を中心として回転運動を開始する。それに必要な力について計算は可能だが、省略する。

この角度には制約があるだろう。最適な角度でなければ、力を伝えられない。(一見したところ、 $\theta_i > 45^\circ$ で当てる必要がある)

そして、それぞれのレンガが、次のレンガに乗りかかり、接点 D が外れずに、一定の角度を保つことにキーポイントがある。E と F は互いに近づく。





レンガ n が倒れる中心点を 0 とし、レンガ $n+1$ が倒れる中心点を G とする。レンガ n の右上の角を E 、レンガ $n+1$ の左下の角を F とすると、 E はレンガ $n+1$ を押し倒しながら、側線を滑りように接し F に近づく。

E と F は、それぞれ 0 と G を中心とする円を描く。 E と F が描く円の交点 H とする。上図のグラフがそれを示している。

F は E より後に回り始めるから、 F が交点 H を行過ぎるまで、レンガ $n+1$ の左側面に接したまま、待つ形になる。

その交点 H を F が過ぎると、レンガ n のレンガ $n+1$ に対する寄りかかりが外れて、地面についてしまう。

半径 $0E$ の長さは a であり、半径 GF は c である。 OG の長さは、 $a+s$ である。円の方程式より交点 H の、 0 を中心とする $x y$ 座標をとると、

$$\begin{cases} x^2 + y^2 = a^2 \\ [x - (a + s)]^2 + y^2 = c^2 \end{cases}$$

この連立式を解けば、交点 $H(x_1, y_1)$ が求められる。(解は省略)

このときのレンガ n の角度 θ_j は、

$$\tan \theta_j = \frac{y_1}{x_1}$$

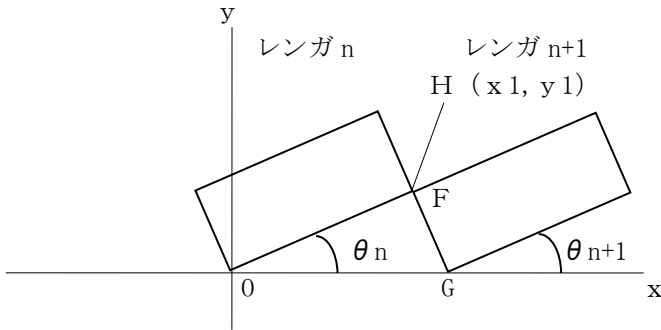
レンガ $n+1$ の角度 $\theta + 1$ がこれより大きい数値であれば、レンガ n はレンガ $n+1$ の側線に乗っていられる。つまり、

$$\tan \theta_j > \frac{y_1}{x_1}$$

を満たせばよいことになる。それが、このドミノの必須条件の一つである。つまり、 F 点は回転し、 H 点に近づくが、 H を越して回転しては

ならない。その角度が θ_j である。

a、c、s の各値はこの条件に合わなければならない。オーストラリアの建設現場で使用されたレンガは、偶然にこの条件を満たしていたことになる。



レンガの設置条件が同じであれば、 θ_n 、 θ_{n+1} は同じ値を保つ。最後尾のレンガm以外は、その角度を保つことになるが、最後尾のレンガmが水平に倒れこむ時、その角度より小さくなるわけで、一つ前のレンガm-1も、支えを失って倒れこむ。復路のドミノが始まることになる。